

英語の進行形が表す含意に関する一考察

山岡 洋

A Study on the Implication of the English Progressive Form

YAMAOKA Hiroshi

桜美林大学

桜美林論考『言語文化研究』第10号 2019年3月

The Journal of J. F. Oberlin University

Studies in Language and Culture, The Tenth Issue, March 2019

キーワード：英語，進行形，アスペクト，未完結，一時性

要 旨

本論文は、英語の進行形が表す副次的な含意について述べたものである。結論としては、英語の進行形は本来的には「未完結」と「一時性」を表すが、副次的意味として、基準時以降に Posterior Point (PP) を設定し、その時点における事象の完結・生起・起動を表すものであることを述べている。

§1でテンスとアスペクトの定義を明らかにし、本稿で用いる用語の説明をしている。§2では、英語の進行形が統語上どのように定義されるもので、意味上どのような意味を表しうるのかを述べている。§3では、語彙的アスペクチュアリティーの分類として、Vendler (1976) と Quirk et al. (1985) の分類を導入し、その分類を元に §4で各語彙的アスペクチュアリティーが進行形で用いられた時に具体的にどのような現れ方をするのかを検証している。結論としては、英語の進行形は本質的には「未完結」と「一時性」を表し、副次的にPPを含意し、そのPPにおいて動詞や述語によって述べられている事象が終結したり、生起したり、起動したりすることを述べている。

§ 0. 序論

Bolinger (1975: 277-78) は、子どもの言語習得に関して、次のように述べている。(以下、本稿では下線は山岡による。)

- (0.1) If, when the verbs are first learned, the child grasps not only their individual meanings but their underlying kinships, each verb will be properly tagged as “state” or “process” Then when the first progressives are formed the ground has already been laid for attaching *-ing* only where it belongs. The child hears other people using the progressive appropriately and notes that *-ing* in this construction is attached to just those forms which he has already categorized in his mind as “process verbs.” He does not have to experiment, and makes no mistakes. The nativist thus assumes that we are born with some capacity to sense the division of verbs into process verbs and state verbs.

(Bolinger (1975: 277-78))

(子どもが最初に動詞を習得する時に、個々の動詞の意味を理解するだけでなく、その潜在的な文法的性質(他の語や文法形式との親和性)も理解するとなれば、それぞれの動詞は「状態動詞」か「動作動詞」として正しく認識されることになる。そう考えると、最初に進行形を使うようになったときには、動詞が動作動詞の場合にのみ *-ing* という接尾辞が付加される基礎が、その時点で築かれていることになる。子どもは、大人が進行形を適切に用いるのを耳にして、進行形で用いられるのは、自分の頭の中で「動作動詞」に分類される動詞のみであることに気付くのである。子どもは、試行錯誤することなしに間違えなくなる。このようなことから、言語生得説を唱える学者たちの主張は、人間は動作動詞と状態動詞を区別する能力を持って生まれてくるというものなのである。)

(訳は山岡による)

本稿では、このような動詞と進行形との相互関係に着目して、進行形が表す本質的な意味とされる「未完結」に加えて、どのような含意を持つかについて考察していく。

§1では、テンスとアスペクトに関するこれまでの定義を検討した上で、本稿で用いるテンスとアスペクトやその他の用語の定義を明確にする。§2では、英語の進行形が一般的にどのように定義され、どのような意味を表すとされているかについて概観する。§3では、上述のBolinger (1975)でも触れられているような、動詞(もしくは述部)が本来的に有する「状態」や「動作」などの時間的性質についてこれまでの研究成果を顧みる。§4では、本稿の主題である進行形が表す副次的意味について、進行形とアスペクト・タイプの異なる動詞との組み合わせを検証しながら論じていく。

§ 1. アスペクト (相) とテンス (時制)

本節では、これまでに提案されてきているアスペクトとテンスの定義を検討した上で、本稿においてどのようにそれらを定義して議論を進めていくかを明らかにする。

まず、アスペクトについては、次のように「時間的內部構造 (internal temporal constituency)」という用語によって定義されることがある。

- (1.1) a. aspects are different ways of viewing the internal temporal constituency of a situation (Comrie (1976: 3))
b. aspect is concerned with the nature of the event, particularly in terms of its 'internal temporal consistency' (Palmer (2001: 1))

アスペクトは、具体的には事象を全体として見るのか、生じている過程に着目するのか、開始時点に着目するのか、終結時点に着目するのかがあり、認知言語学的には次のように定義される。

- (1.2) aspect is a verbal device for constructing mental images of processes and these aspectual values correspond to the way(s) a process is profiled in different scanning modes: summary vs. sequential scanning and mono sequential vs. polysequential scanning (Zanned (2011: 181))

アスペクトの研究は、元来はこれらの意味を動詞の語形変化で表すギリシャ語やロシア語などを対象とした研究であったが、現在では、そのような語形変化を持たない言語にもその研究対象が広げられるようになった。(山田 (1984: 7)) そして、その延長としてアスペクトを形態論的範疇に限定せず、動詞句、述部、ひいては文全体に広げる流れがある。

- (1.3) 'aspect' usually refers to the organization with respect to time, of an event represented by some linguistic expression such as a verb, verb phrase, clause or sentence (Tenny (1987: 12))

このようになると、アスペクトをいくつか下位分類する必要性が出てくる。つまり、アスペクトを文法範疇と見るのか、概念的範疇と見るのか、また、動詞の語形変化に限るのか、動詞句や文まで広げるのかという問題である。工藤 (2004: 26) は次のように整理している。

- (1.4) <形態論的カテゴリー>: 単語の語形変化による文法的カテゴリー。アスペクト、テンス、ムードという用語は形態論的カテゴリーを示すものとして使用する。形態論的形式は文法化の最も進んだものである。
<意味・機能的カテゴリー>: 単語の語形変化 (形態論的手段) のみならず、副詞などの他の表現手段も含んでのカテゴリー。アスペクチュアリティー、テンポラリティー、モダリティーという用語は、構文的、語彙的など、様々な表現手段による意味・機能的カテゴリーを示すものとして使用する。アスペクチュアリティー、テンポラリティー、モダリティーはどの言語にもあるが、アスペクト、テンス、ムードという形態論的カテゴリーは、ある言語もあれば、ない言語もあり、まだ発達中の言語もある。(工藤 (2004: 26))

テンス・アスペクト・ムードの研究分野でこのような用語法が完全に定着しているわけではないが、例えば、次のような場合にアスペクトという用語をどのように用いるかが未だに定まっていない。

(1.5) He was nodding his head. (Quirk et al. (1985: 208))

この文においては、過去進行形によって反復の意味が表されているが、文法形式をアスペクト、表される意味をアスペクチュアリティーとすると、進行形を未完結アスペクトの形態、それによって表される意味が反復アスペクチュアリティーと表現することが可能になる。これは、次のように単純現在テンスが未来テンポラリティーを表すものと平行する。

(1.6) I leave for Chicago tomorrow. (Long and Long (1971: 232))

また、Huddleston and Pullum (2002: 172) もほぼ同様の用語法を採用している。

(1.7) The distinction between mood and modality is like that between tense and time, or aspect and aspectuality: mood is a category of grammar, modality a category of meaning. Mood is the grammaticalisation of modality within the verbal system. The term ‘mood’ is most usually applied to inflectional systems of the verb, as in the contrast between indicative, subjunctive, and imperative in such languages as Latin, French, and German.

英語においては、典型的には進行形が未完結アスペクトを表す形態とされるが、時として完了形も完了アスペクトを表す形態とされることがある。

(1.8) A grammatical category of the verb, indicating the temporal point of view from which an event, or state of affairs, is perceived as taking place. In English, two contrasts of aspect are usually recognized. (a) **The progressive aspect**, for example is *working*, indicates that the event/state is in progress -- that is, is seen from a continuing, on going point of view. (b) The **perfect** (sometimes called perfective) **aspect**, for example *has worked*, indicates that the event/state is seen from a completed, retrospective point of view. Both aspect constructions may be combined, as in *has been working* (called perfect progressive). There are therefore these four aspectual possibilities in English: (Leech (2006: s.v. *aspect*))

このようなアスペクト研究の流れの中で、本稿ではアスペクトを次のように定義して論を進めていく。

(1.9) アスペクトとは、話し手がある事象を記述する際に、その事象の時間的內部構造をどのように捉えるかに応じて表現する動詞に関わる文法形式である。一方、その文法形式が表す意味を文法的アスペクチュアリティー (grammatical aspectuality) と呼ぶ。また、語によって表されるアスペクトを語彙的アスペクチュアリティー (lexical aspectuality) と呼ぶ。

以上のようなアスペクト研究の流れに対して、テンスに関してはかねてよりそれほど大きな定義の違いはない。

(1.10) a. Tense is grammaticalised expression of location in time. (Comrie 1985: 9)

b. Tenses, in the core case, locate the events that sentences represent in time.

(Hornstein (1990: 9))

つまり、アスペクトに関しては、文法的範疇と捉えるか概念的範疇と捉えるかに関しては、まだ揺れがあるが、テンスに関しては、それを文法的範疇と捉えるというのが主流である (cf. Jespersen (1949 IV: 2), Lyons (1977: 678), Comrie (1981: 24), Fleischman (1982: 10), Quirk et al. (1985: 176), Lewis (1986: 50), Davidsen-Nielsen (1990: 54), Jackson (1990: 16), Declerck (2006: 22))。したがって、本稿でもテンスは文法的範疇と捉え、次のように定義をして論を進めていく。

(1.11) a. テンスは、事象の時間的前後関係を、動詞の文法的な形で表したものである。

b. テンスに対応する意味的範疇には「時間指示 (time reference)」という用語を用いる。

次節では、英語の進行形に関して形態的な側面と意味的な側面を観察していく。

§ 2. 英語の進行形の統語的・意味的特性

まず、英語の進行形は、統語的に助動詞 *BE* と動詞の現在分詞の結合によって形成される。

(2.1) a. 助動詞 *BE* + 現在分詞 *-ing* (山岡 (2014: 270))

b. the auxiliary *be* + a following gerund-participle

(Huddleston and Pullum (2002: 162))

この場合、テンスおよび主語との人称と数に関する一致現象は助動詞の *BE* が担うことになる。

(2.2) a. Joan *is singing* well.

b. Joan *was singing* well. (Quirk et al. (1985: 197))

ここから観察されることは、助動詞 *be* が担うテンスによって設定された「基準時 (Reference Point: RP)」において *BE* + *-ing* という形態をとる進行形が何かを表していることになる。

では、その基準時において進行形によって表される意味、すなわち文法的アスペクチュアリティーにはどのようなものであるのか。山岡 (2004: 270ff) では、Swan (2016), Leech (2004) に基づいて以下のようにまとめられている。

(2.3) a. 進行中の動作

‘What are you doing?’ ‘I’m writing a letter.’ (Swan (2016: 31))

b. 進行中の反復動作

The children were jumping up and down in excitement.

c. 進行中の習慣的動作

He is constantly finding fault with others. (b, c は Swan (2016: 32))

d. 一時性

What were you wanting? (Leech (2004: 29))

e. 推移

He is resembling his father more and more as the years go by. (Leech (2004: 31))

f. 未来

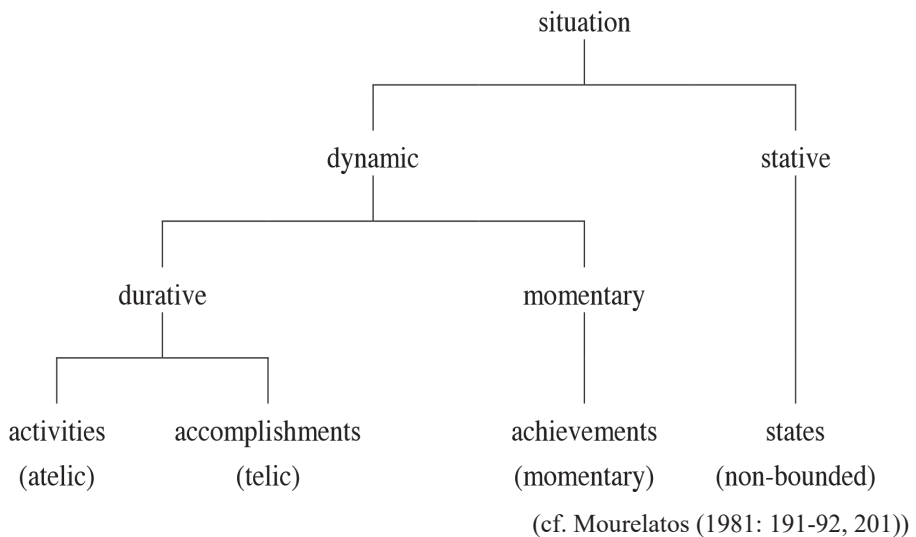
When are you going back to France? (Leech (2004: 61))

本節では、進行形という文法形態が表す文法的アスペクチュアリティーを観察したが、次節では動詞が表す語彙的アスペクチュアリティーについて概観する。

§ 3. 語彙的アスペクチュアリティー

本稿では、前節で概観した進行形という文法形態が表す文法的アスペクチュアリティーに対する語彙的アスペクチュアリティーは、動詞のみによって表されるものではなく、動詞およびその補部を含む「述部 (predicates)」によって表されるものという立場を取る。述部の表す語彙的アスペクチュアリティーの分類に関しては、Vendler (1976) による分類が代表的である。Vendler (1976) のすぐれている点は、動詞に限定せず、その補部なども含めてアスペクトの分類を行っている点である。さらに、従来であればdynamic (動作) と stative (状態) という2分類だったものを、さらに期間を持つ (durative) 述部と瞬時的な (momentary) 述部に分け、さらに durative を目標点を持つ (telic) accomplishments と目標点を持たない (atelic) activities に分けた点である。この分類により、進行形において表されるさまざまな意味が体系化された。

(3.1) Vendler (1967) による語彙的アスペクチュアリティーの分類



Activities (活動) に属するのは、動的事象で時間的な幅があり、その内容が変化すること

なく、明確な終結点を持たない (atelic) 動詞類で、具体的には run around, walk, swim, push a cartなどが含まれる。これらの動詞類は、For how long …? で疑問化することは可能であるが、How long did it take …? で疑問化すると不自然になる。

(3.2) *For how long did he push the cart? – He was pushing it for half an hour.*

?How long did it take to push the cart? (Vendler (1967: 100-101))

Accomplishments (達成) は、activities同様、動的事象で時間的な幅があり、事象の内容は変化しないが、明確な終結点を持つ (telic) 動詞類で、具体的には、run a mile, paint a picture, grow up, recover from illnessなどがここに分類される。例えば、runは明確な終結点を持たないため、activitiesに分類されるが、run a mileの場合には、1マイル走り終えるという明確な終結点を持つために、accomplishmentsに分類される。accomplishmentsは、activitiesとは逆に、How long did it take …? で疑問化することは可能であるが、For how long …? で疑問化すると不自然になる。

(3.3) *How long did it take to draw the circle? – It took him twenty seconds to draw the circle.*

?For how long did he draw the circle? (Vendler (1967: 101))

Achievements (到達) は、動的事象で時間幅を持たず瞬間的に生起する動詞類で、具体的には、recognize, find, win (the race), start/stop/resume, be born/dieなどがここに分類される。これらの動詞類は、At what time …? や At what moment …? という疑問化が可能である。

(3.4) *At what time did you reach the top? At noon sharp.*

At what moment did you spot the plane? At 10:53 A.M. (Vendler (1967: 102))

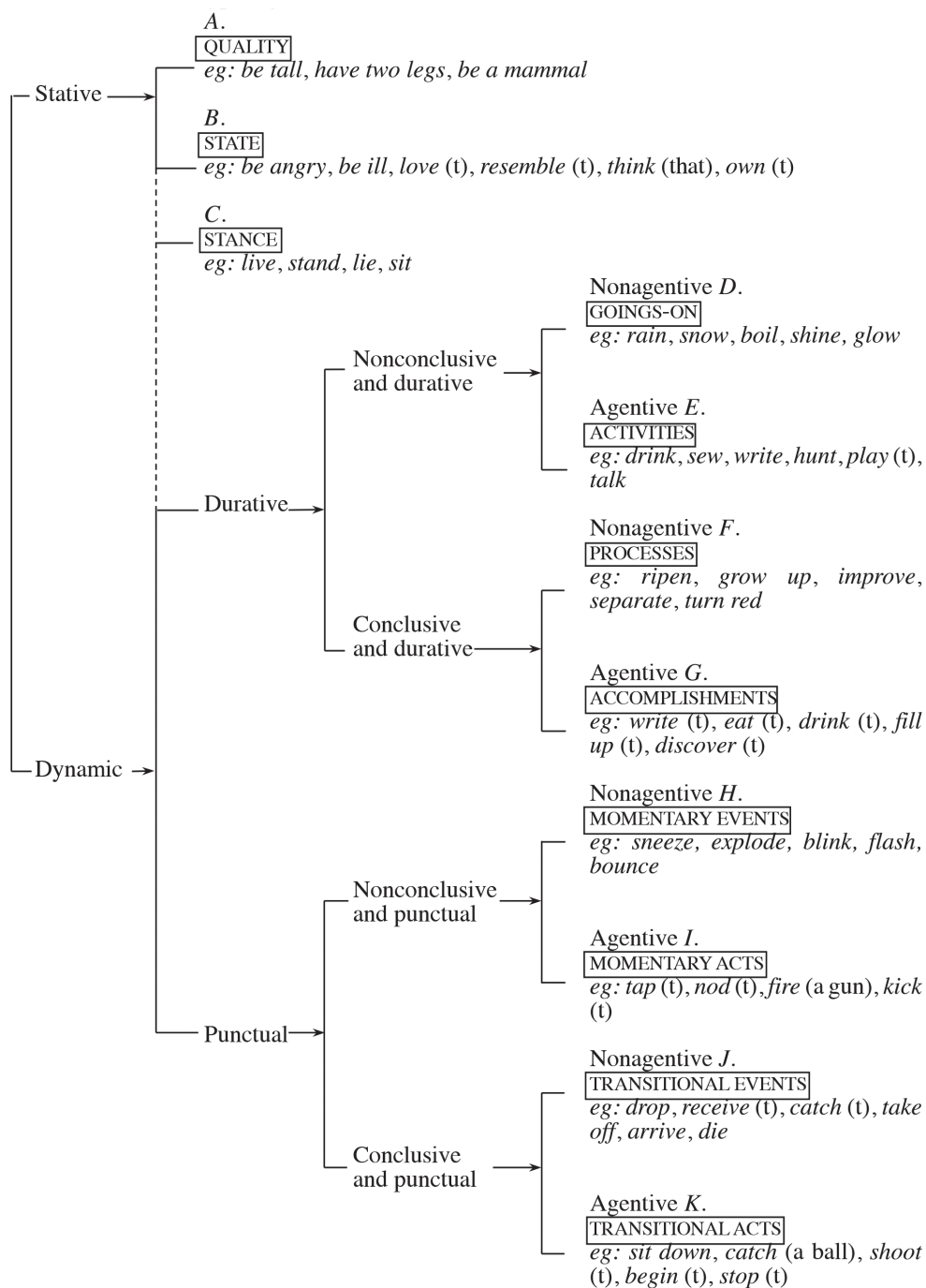
States (状態) は、いわゆる状態動詞 (Stative Verbs) の類で、事象が持つ時間的幅に限りがなく、事象内容も原則として変化しない。典型的な統語的特徴としては、進行形との共起が不可能であるのが原則である。ただし、期間を表す副詞との共起は可能で、For how long …?, How long …? による疑問化が可能である。Statesに属する動詞類としては、desire, want, love, hate, dominateなどが挙げられる。

(3.5) *For how long did you love her? – For three years.*

How long did you believe in the stork? – Till I was seven.

また、Vendler (1967) よりも、細かい語彙的アスペクチュアリティーの分類として、Quirk et al. (1985) による分類がある。

(3.6) Situation types by Quirk et al. (1985)



KEY

(t) signifies 'transitive'

(that) signifies a following *that*-clause

(Quirk et al. (1985: 201))

Stative types A と B は、人や物の性質や状態を表すために、原則として進行形と共起することが不可能であるか、もしくは難しい。

(3.7) a. *Mary *is being* a Canadian.

*Mary *is having* blue eyes.

b. ?*Mary *is being* tired.

?Mary *is having* a bad cold.

(Quirk et al. (1985: 200))

ただし、次の (3.8a, b) のように事象の一時的な状態や行為を表す場合や、(3.8c) のように述部が表す状態への段階的な移行を表す場合には、進行形で用いられることもある。

(3.8) a. The neighbours *are being* friendly.

Suggests that 'friendliness' is a form of behaviour (perhaps insincere).

b. I *am hoping* you will come.

Makes the speaker's attitude more tentative and perhaps more polite.

c. Tina *is resembling* her sister more and more.

With the comparative construction, the progressive turns the stative meaning into a process meaning.

(Quirk et al. (1985: 202))

Type C は状態動詞と動作動詞の中間に位置していて、単純形で用いられた場合には状態の意味を表すが、進行形でも頻繁に用いられ、大まかにはその意味にほとんど違いはなく、敢えて違いを述べれば、進行形の方が一時的な状態を表す。

(3.9) a. James *lives* in Copenhagen. [permanent residence]

James *is living* in Copenhagen. [temporary residence]

b. The city *lies* on the coast. [permanent position]

People *were lying* on the beach. [temporary posture]

c. His statue *stands* in the city square. [permanent position]

He *is standing* over there. [temporary posture]

(Quirk et al. (1985: 206))

Types D, E は、Vendler (1967) の分類では activities に相当し、時間幅を持ち目標点を持たない動作動詞 (述語) である。

(3.10) a. It *is raining*.

b. *Is* your watch *working*?

c. The engine *was running* smoothly.

(3.11) a. Jill *was writing / working / singing / dancing / eating / sewing / swimming / etc.*

b. The children *are playing* chess. Norman *is reading* poetry.

(Quirk et al. (1985: 207))

Types F, G は、Vendler (1967) の分類では accomplishments に相当し、時間幅を持ち目標点を持つ動作動詞 (述語) である。

(3.12) a. The weather *is getting* warmer.

b. Our economic prospects *are now improving*.

- c. The sun *is ripening* our tomatoes nicely. (Quirk et al. (1985: 207))
- (3.13) a. Jill *is knitting* herself a sweater.
- b. The boys *were swimming* across the estuary.
- c. One of the boys *was drowning*, but I dived in and saved him.

(Quirk et al. (1985: 208))

Types H, Iは, Vendler (1967) では, achievementsに分類されるが, 厳密に言えば, Vendler (1967) ではこのような習慣的な出来事や動作には言及されていない。これらの習慣的な動詞は, 進行形で用いられると原則として繰り返される出来事や動作を表す。

- (3.14) a. The tops of the trees *were waving* in the wind, and the branches *were shaking* and *knocking* against the side of the house. Downstairs, a door *was banging*.
- b. John *was nodding* his head.
- c. Someone *was firing* at us.
- d. Kirov's horse *is jumping* well. (Quirk et al. (1985: 208))

最後に, Types J, Kは, Type H, Iと同じように時間的幅を持たない瞬間的な動詞(述語)であるが, これはまさにVendler (1967) の分類ではachievementsに相当するもので, Type H, Iとの違いは, 結果的に異なった状況を生み出す点である。

- (3.15) a. The train *is arriving* at platform 4.
- b. The queen *was dying*.
- c. I'm *stopping* the car at this garage.
- d. It looks as if Juarez *is scoring* another goal.
- e. The Boeing 747 *is taking off*. [a period leading up to the change of state]
- f. At the airport, several freight aircraft *were taking off* noisily.

(Quirk et al. (1985: 209))

次節では, これらの動詞が持つさまざまな語彙的意味の違いが, 進行形で用いられた場合にどのような意味の違いにつながるかを検討していく。

§ 4. 進行形の本質的な意味および副次的な意味の再考

本節では, これまでに主張されてきている進行形の表す本質的な意味に関して振り返る。

まず, 伝統的に, 進行形は「時間枠 (a temporal frame)」を形成すると言われている。Quirk et al. (1985: 209) では, 次のように説明されている。

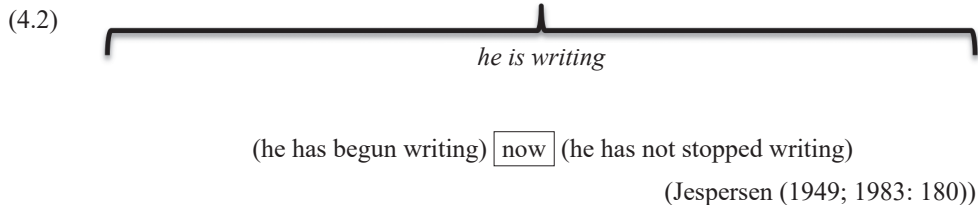
- (4.1) The progressive generally has the effect of surrounding a particular event or point of time with a 'temporal frame', which can be diagrammed:



That is, within the flow of time, there is some point of orientation from which

the temporary event or state described by the verb can be seen to stretch into the future and into the past.

この「時間枠」の発想は、元々は Jespersen (1949; 1983: 180) によって次のように提示されている。



最近では、Swan (2016: 32) で、「時間枠」という表現は使われていないが、「現在とその周辺 (now or around now)」という表現を用いて次のように説明されている。

(4.3) We use the present progressive to talk about temporary situations that are going on now or 'around now': before, during and after the moment of speaking.

このように、多くの文法家によって、進行形が表す意味が発話時を中心として過去と未来に伸びる時間枠、もしくはそれに類似した表現で説明されてきている。

一方で、進行形が表す意味をアスペクトの観点から説明することもよくある。大江 (1982: 54) は、「非完結性 (imperfectivity)」という表現で説明している。

(4.4) 進行形 (progressive form) は [be + 動詞の現在分詞 (~ing)] で、その基本的な意味は、対応する動詞の単純形 (非進行形) が「完結性」(perfectivity) を表すのに対して、「非完結性」(imperfectivity) である。

柏野 (1999: 110) は、Leech and Svartvik (1994) からの引用で、「一時性 (temporariness)」と「未完了性 (incompletion)」という用語を用いている。

(4.5) 進行形は、一般に、ある特定の時点での「進行中の行為」を表すが、その中核的な意味は「一時性」(temporariness) と「未完了性」(incompletion) である (Leech and Svartvik (1994: 73))。

さらに、進行形が表す本質的な意味を、テンスという観点から述べることもある。溝越 (2016: 60) は、次のように説明する。

(4.6) 完了形が「相対的な過去」であるのに対して、進行形は「相対的な現在」である。

この「相対的な現在」というのは、言い換えると、「特定の時点ないし同時に起きている別の出来事に結びつけて出来事を記述する」ということで、例えば次のような場合には、現在 (発話時) という時点において友人とお茶をするという出来事が真であることを述べているということになる。

(4.7) Mom *is having* tea with her friends (now). (溝越 (2016: 60))

それでは、果たして英語の進行形はアスペクトを表す形態であるのか、テンスを表す形態であるのかを考えてみる。Ogihara (1996: 8) は、テンスとアスペクトの違いを次のように説明する。

(4.8) a tense morpheme can be regarded as any expression that serves to affect the time of evaluation for a sentence without changing its “propositional content.” On the other hand, aspect morphemes affect the “propositional content” itself.

つまり、テンスというのは出来事全体を時間的に位置付けるものであるから、その事象の命題内容に変化を与えることはないが、アスペクトは出来事の様々な側面を異なった見方で眺めるものであるから、その命題内容に影響を与えるものであるというのである。これはつまりどのような事実と繋がるかと言うと、英語の単純テンスや完了形はすべての動詞と共に起可能であるが、進行形の場合には原則として状態動詞とは共起しないという事実と繋がる。

- (4.9) a. John has sung.
b. John is singing. (Comrie (1976: 44))
c. I like this wine
d. *I'm liking this wine. (Swan (2016: 33))

つまり、英語の完了形は、テンス形式であるため、命題内容に影響を与えないから動作動詞でも状態動詞でも用いることができるが、進行形はアスペクト形式で命題内容に影響を与えるから状態動詞を進行形で用いることができないと説明されるのである。(cf. 山岡 (2001: 234))

このような事実から、本稿では英語の進行形はアスペクトを表す形式で、表されるアスペクトは「未完結 (imperfective)」であると考えられる。また、「時間棒」の「棒」は、結局は柏野 (1999: 110) の述べるところの「一時性」に相当するため、これら2つの意味を進行形の表す本質的な意味と捉える。

(4.10) 英語の進行形が表す本質的な意味

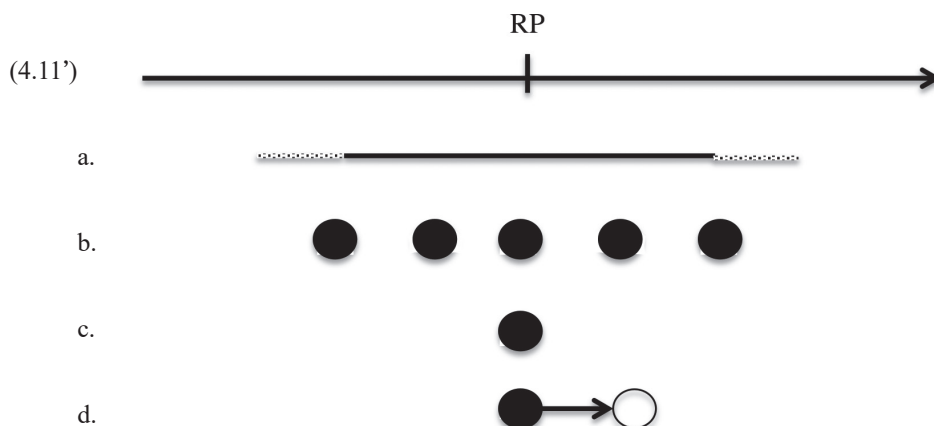
- a. 未完結 (imperfectiveness)
b. 一時性 (temporariness)

以下では、(4.10) を前提として、英語の進行形が副次的に表す意味を検討していくが、それに先だって、英語の単純形と進行形が表す意味を図示して比較しておきたい。

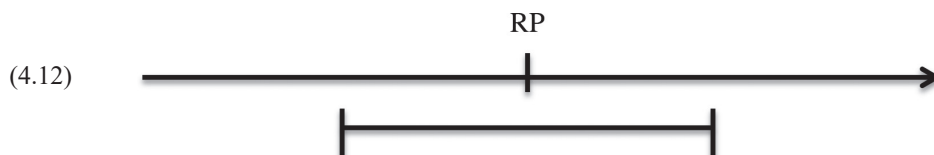
まず、Leech (2004: 6-11) に基づいて英語の単純現在テンスが表す意味を列挙すると次の (4.11) のようになる。

- (4.11) a. Honesty is the best policy.
b. We don't go out much (in the evenings).
c. We accept your offer.
d. I retire from work next month.

(4.11a) は、諺でいわゆる不変の事実を表している。(4.11b) は、長期に渡る日常繰り返される習慣を表している。(4.11c) は、発話時に瞬間的に終わる1回限りの行為を表している。最後に、(4.11d) は変更の余地のない未来を表している。これらを図示すると次の(4.11') のようになる。(なお、以下では、§2同様、基準時をRPで示す。) なお、(4.11'd) の場合、白丸は動詞で述べられている事象が生起する時点を表している。

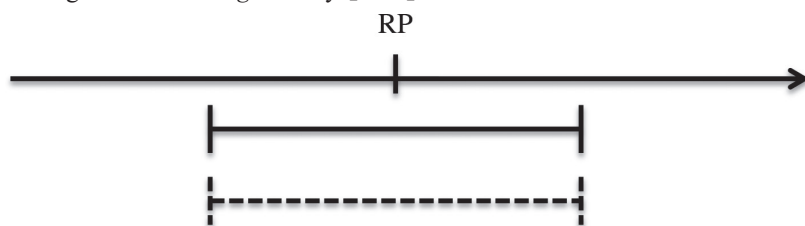


これに対して、進行形が表す意味を図示すると以下のようなになる。



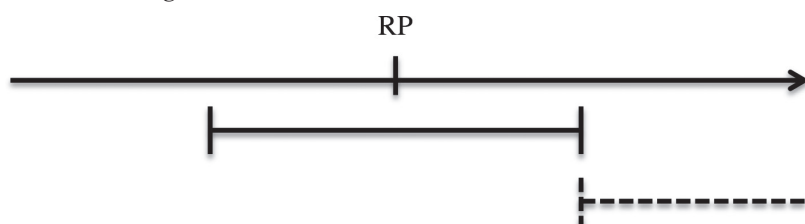
以下では、この進行形の意味が、具体的に様々な語彙的アスペクチュアリティを持つ動詞（もしくは動詞句）で用いられた場合に、どのような現象が起きるかを(3.7)–(3.14)および進行形が未来を表す場合の(2.3)の例を用いて観察する。以下の図の中では、進行形の表す文法的アスペクチュアリティは実線で、動詞の表す語彙的アスペクチュアリティは点線で表す。[]内は、Vendler (1967) による分類を表す。(以下、例文番号は §2, §3 で用いたものを記す。)

(3.8) a. The neighbours *are being* friendly. [state]



be friendly という述語は states に分類されるものであるが、その述語が表す事象は、進行形が表す一時的な文法的アスペクチュアリティーの中にそのまま組み込まれている。つまり、一時的に親しみやすくしているだけであるから、その事象は近い将来には終結することが暗に示されている。

(3.8) c. Tina *is resembling* her sister more and more. [state]

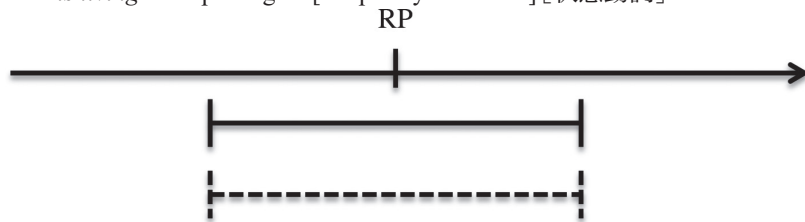


resemble her sister という述語は states に分類されるものであるが、それが表す事象は進行形が表す一時性の中に組み込まれていない。つまり、「似ている」状態はまだ始まっておらず、その事象は近い将来には起動することが暗に示されている。

(3.9) a. James *lives* in Copenhagen. [permanent residence] [state]



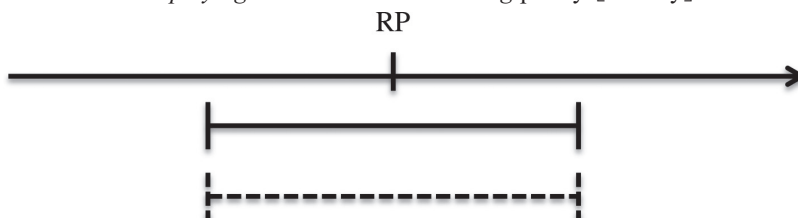
James *is living* in Copenhagen. [temporary residence] [状態動詞]



live は、Vendler (1967) の分類では state に分類され、Quirk et al. (1985) の分類では stance

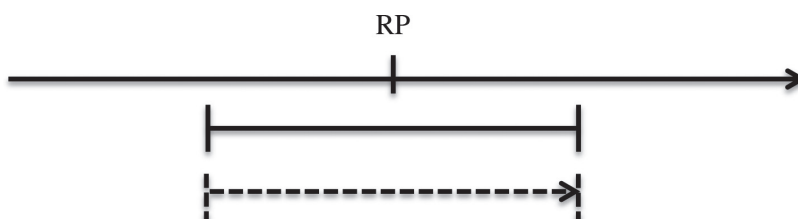
に分類されるものであるが、いずれにしても、進行形になると一時的な状態を表す。この場合は、現在テンスにおける単純形と進行形の対比により、点線部で示されている近い将来での居住の終結がより鮮明に表されている。

(3.11) b. The children *are playing* chess. Norman *is reading* poetry. [activity]



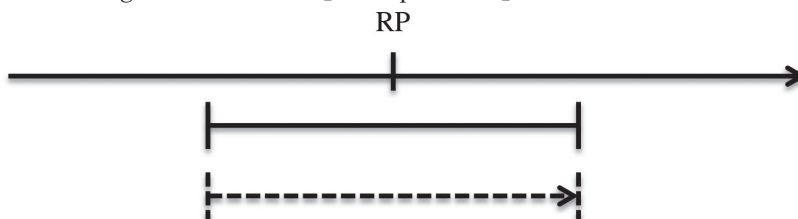
play chess と reading poetry は activities に分類される。ここで注目すべきは、chess と poetry が不可算名詞である点で、このことによってこの述語によって表されている事象は明確な終結点（目標点）を持たないことになる。進行形になるとそれぞれの動作が現在一時的に進行していることになり、すなわち、それぞれが近い将来に終結することが暗に示されている。

(3.12) c. The sun *is ripening* our tomatoes nicely. [accomplishment]



ripen はこの場合、太陽という物が主語になり熟れる対象となるトマトという果実が目的語になっており、トマトが熟れて食べられる状態になるまでの過程を表している。最終的にトマトが熟れる状態になることが終結点で、その状態までの推移が点線矢印によって示されている。

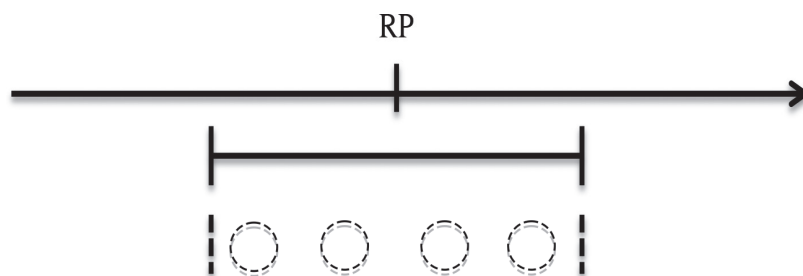
(3.13) a. Jill *is knitting* herself a sweater. [accomplishment]



knit herself a sweater という述語は不定冠詞付き単数可算名詞の a sweater を直接目的語として伴っていることから、それを編み上げる時点が終結点となる。進行形で用いられるとその終結点までの過程を表すことから、(3.12c) の場合同様、それが点線矢印によって表されている。

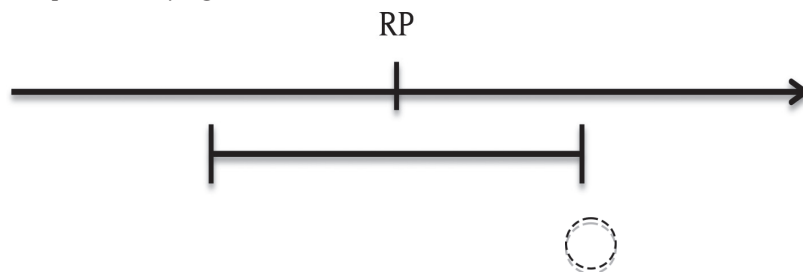
- (3.14) a. The tops of the trees *were waving* in the wind, and the branches *were shaking* and *knocking* against the side of the house. Downstairs, a door was banging.

[Momentary Events (Quirk et al. (1985))]



ここに用いられている wave, shake, knock, bang は、Vendler (1967) の分類では、表されている出来事が瞬間的に生起するという点では achievements と共通するが、その事象の生起の前後で状況が変わらないという点では achievements とは異なる。言い換えると、前段階を伴わずに瞬間的に生起する事象を表している。これらの動詞が進行形で用いられると、典型的には、瞬間的な事象が一時的に繰り返されることになる。事象の一つ一つはその場で完結するが、事象の繰り返しが一時的で、その繰り返しという事象が近い将来に終結することが暗示されている。

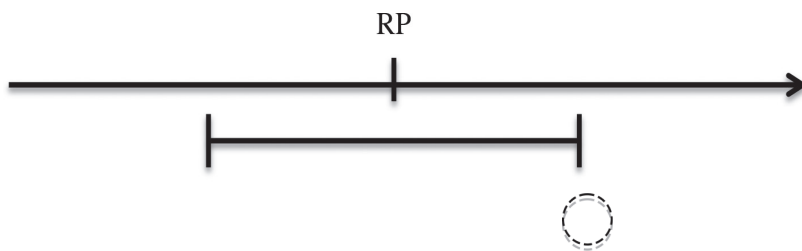
- (3.15) a. The train *is arriving* at platform 4. [achievement]
The queen *was dying*. [achievement]



arrive と die はその事象の生起が瞬間的で、その事象の生起の前と後とは状況が異なる。arrive の場合であれば、arrive の前は到着しておらず、arrive の後は到着しており、die の場合であれば、die の前は生きており、die の後は死んだ状態になる。これらの動詞は、Vendler (1976) では、achievements に分類され、進行形で用いられると、その動詞が表す事

象までの推移を表し、その事象は暗に未来に生起するものとして描写され、arriveもdieも進行形が表す文法的アスペクチュアリティーの中には組み込まれていない。

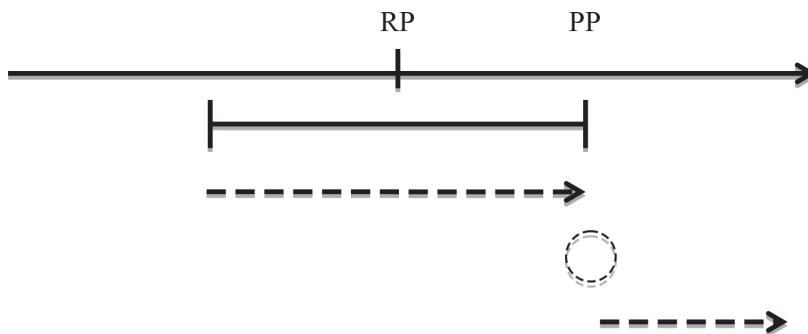
(2.3) f. When *are you going* back to France? [accomplishment]



まずこの文で注目すべきは、文全体が未来を表している点である。これは、go back to Franceという事象が未来のある時点でひとつのまとまりとして生起することが表されている。go back to Franceという述語そのものはFranceに帰るという終結点を持ちかつ事象に時間幅があるためaccomplishmentであるが、未来時を表す場合には事象の内部構造に関わらず、その事象全体が完結相になって、未来時に位置付けられる。そのために上の点線の丸のように表される。

ここまで様々な語彙的アスペクチュアリティーを持つ動詞(述語)が進行形で用いられた場合に、どのような意味を表すかを図示しながら検証してきた。これまでの観察をまとめて図示すると次のようになる。

(4.15)



本節では、(4.11)にまとめたように、英語の進行形は本質的に「未完結」と「一時性」を表すが、その文法的アスペクチュアリティーに様々な異なった語彙的アスペクチュアリティーを持つ動詞や述語を挿入すると、大きく分けると3通りの異なった場合があることが分かる。1つには、(3.8a), (3.9a), (3.11b), (3.12c), (3.13a), (3.14a)の場合のように、動詞によって示されている事象の生起が進行形の文法的アスペクチュアリティーと重なり、その事象が将来的に終わることを表す。(4.15)では、それが進行形の文法的アスペクチュアリ

ティーと重なる形で、点線矢印で示されている。もう1つは、(3.15a), (2.3f) の場合のように、動詞によって示されている事象が未来の時点において生起する場合で、これが文法的アスペクチュアリティーの終点で点線の丸で表されている。最後のパターンは、(3.8c) のように、動詞によって表されている事象の生起が未来において始まるパターンで、それが文法的アスペクチュアリティーの終点から始まる点線矢印で表されている。

以上の観察から明らかなことは、進行形は副次的意味として、常に未来のある時点を含意し、その時点において事象が終結したり、瞬間的に生起したり、起動したりすることである。本稿では、この未来のある時点を「以降点 (the posterior point: PP)」と呼び、これまでの考察をまとめると次の (4.16) のようになる。

(4.16) 英語の進行形は常にPPを含意し、そこに用いられる動詞や述語の語彙的アスペクチュアリティーや、進行形そのものが意味するものに応じて、そのPPにおいて事象が終結したり、生起したり、起動したりする。

さらに、進行形の表す本質的な意味と副次的な意味をまとめて述べると、次の (4.17) のようになる。

(4.17) 英語の進行形はアスペクトを表す文法形態であり、表されるアスペクトは、明示されるRPにおける未完結アスペクトと、一時性である。そして副次的には、動詞や述語で述べられている事象のPPにおける終結相・瞬時相・起動相のいずれかである。

§ 5. まとめ

本稿では、§1でテンスとアスペクトの定義を明らかにし、本稿で用いる用語の説明をした。§2では、英語の進行形が統語上どのように定義付けられ、意味上どのような意味を表すのかを述べた。§3では、語彙的アスペクチュアリティーの分類として、Vendler (1967) と Quirk et al. (1985) の分類を紹介し、その分類を元に §4で各語彙的アスペクチュアリティーが進行形で用いられた時に具体的にどのような現れ方をするのかを検証した。結論としては、英語の進行形は本質的には「未完結」と「一時性」を表し、副次的にPPを表し、そのPPにおいて動詞や述語によって述べられている事象が終結したり、生起したり、起動したりすることを述べた。

今後の課題としては、(4.8) で触れた溝越 (2016: 60) で主張されている進行形のテンス性についての検証が必要であり、また語彙的アスペクチュアリティーの分類の再検証も必要である。また、今回は触れなかったが、進行形の表す意味としていわゆる「超時間的」意味と、単純形や現在完了との比較も必要である。さらには、英語の進行形の多言語との比較、特に日本語の「テイル」との比較なども今後の課題である。

References

- Bolinger, Dwight (1975) *Aspects of Language*, 2nd ed. Harcourt, New York.
- Comrie, Bernard (1976) *Aspect*, CUP, Cambridge.
- Comrie, Bernard (1981) "On Reichenbach's Approach to Tense," *CLS* 17 24-30.
- Comrie, Bernard (1985) *Tense*, CUP, Cambridge.
- Davidsen-Nielsen, Niels (1990) *Tense and Mood in English: A Comparison with Danish*, Topics in English Linguistics 1, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Declerck, Renaat (1991) *Tense in English: Its Structure and Use in Discourse*, Germanic Linguistics, Routledge, London.
- Declerck, Renaat (2006) *The Grammar of the English Verb Phrase, Volume 1: The Grammar of the English Tense System: A Comprehensive Analysis*, Topics in English Linguistics 60-1, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Fleischman, Suzanne (1982) *The Future in Thought and Language: Diachronic Evidence from Romance*, Cambridge Studies in Linguistics 36, CUP, Cambridge.
- Hirtle, W. (2007) *Lessons on the English Verb*, OUP, Oxford.
- Hornstein, Norbert (1990) *As Time Goes By: Tense and Universal Grammar*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*, CUP, Cambridge.
- Jackson, Howard (1990) *Grammar and Meaning: a Semantic Approach to English Grammar*, Learning about Language, Longman, London.
- Jespersen, Otto (1949; 1983) *Modern English Grammar on Historical Principles IV*, George Allen and Unwin; Meicho-Fukyu-Kai, London; Tokyo.
- 柏野健次 (1999) 『テンスとアスペクトの語法』 開拓社叢書 9, 開拓社, 東京.
- 工藤真由美 (2004) 『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系』 ひつじ研究叢書 (言語編) 35, ひつじ書房, 東京.
- Leech, Geoffrey (2004) *Meaning and the English Verb*, 3rd ed., Longman, London.
- Leech, Geoffrey (2006) *A Glossary of English Grammar*, Edinburgh University Press, Edinburgh.
- Leech, Geoffrey and Jan Svartvik (1994) *A Communicative Grammar of English*, 2nd ed., Longman, London.
- Lewis, Michael (1986) *The English Verb: An Exploration of Structure and Meaning*, Language Teaching Publications, London.
- Lyons, John (1977) *Semantics*, CUP, Cambridge.
- 溝越彰 (2016) 『時間と言語を考える — 「時制」とは何か —』 開拓社, 東京.
- Mourelatos, Alexander P. D. (1981) "Events, Processes, and States," *Syntax and Semantics 14: Tense and Aspect*, Eds. by Philip Tedeschi and Anni Zaenen, 191-212, Academic Press, New York.
- Ogihara, Toshiyuki (1996) *Tense, Attitudes, and Scope*, Studies in Linguistics and Philosophy 58, Kluwer, Dordrecht.
- 大江三郎 (1982) 『動詞 (I)』 講座・学校英文法の基礎 第四卷, 研究社, 東京.
- Palmer, F. R. (1988) *The English Verb*, 2nd ed., Longman, London.
- Palmer, F. R. (2001) *Mood and Modality*, 2nd ed., Cambridge Textbooks in Linguistics, CUP, Cambridge.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.

- Rothstein, S. (2004) *Structuring Events*, Blackwell, Oxford
- Swan, Michael (2016) *Practical English Usage*, 4th ed., Oxford UP, Oxford.
- Thomson, A. J. and A. V. Martinet (1986) *A Practical English Grammar*, 4th ed., Oxford UP, Oxford.
- Tenny, Carol (1987) *Grammaticalizing Aspect and Affectedness*, Ph.D. diss., MIT.
- Tenny, Carol and James Pustejovsky, eds. (2000) *Events as Grammatical Objects: the Converging Perspectives of Lexical Semantics and Syntax*, CSLI, Stanford.
- Vendler, Zino (1967) “Verbs and Times,” *Linguistics and Philosophy*, Ed. by Zino Vendler, 97-121, Cornell University Press, Ithaca, New York.
- 山田三枝 (1984) 『アスペクト論』三修社, 東京.
- Yamaoka, Hiroshi (1989) ‘Aspect of English Verbs in the Progressive Form,’ *Journal of English Language and Literature* (The English Literary Society of Nihon University) 37, 141-154.
- 山岡洋 (2014) 『新英文法概説』開拓社, 東京.
- Zanned, Lazhar (2011) ‘Aspect as a Scanning Device in Natural Language Processing,’ *Cognitive Approaches to Tense, Aspect, and Epistemic Modality*, Eds. by Adeline Patard and Frank Brisard, 181-213, John Benjamins, Amsterdam.

